

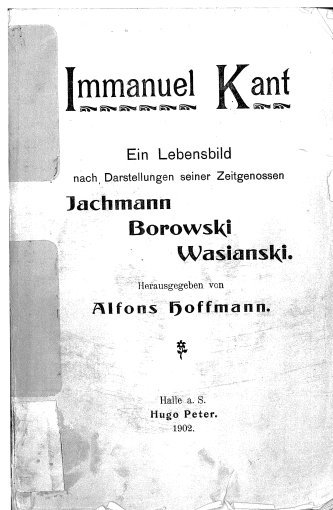
カントへの私の道

福 谷 茂

1 牢獄で読むカント

本日は皆さんの前で講演をする機会を与えてくださりましたことに御礼申し上げます¹。講演に先立って先日、伊藤貴雄先生とご一緒に創価教育研究所の方に伺い、収蔵されている書籍や資料を拝見しました。その後塩原将行さんから牧口常三郎の評伝も頂戴いたしました。牧口常三郎の蔵書の中に入っていた、カントおよび哲学関係の洋書の写真も見せていただきました。今画面にアップされたものが、カントに関わる書籍です(写真1)。この本はカントを勉強する人間は必ず目を通したことがあるカントの伝記に関する基本的な資料で、現在でも、新しい版が出版されております。上がヤッハマン Jachmann、その下がボロウスキー Borowski、下がヴァジアン

(写真1：牧口が所蔵していたヤッハマン、ボロウスキー、ヴァジャンスキー著『イマヌエル・カント 同時代人の記述による伝記』(創価学会所蔵))



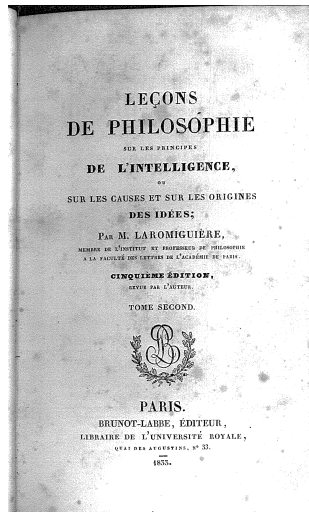
Shigeru Fukutani (創価大学大学院文学研究科教授、京都大学名誉教授)

¹ 本稿は「牧口常三郎生誕150周年記念講演会」(池田大作記念創価教育研究所主催、2021年6月7日、オンライン開催)における講演「カント哲学へのアプローチ」の原稿に加筆修正を施したものである。

スキー Wasianski と、3 人の著者名が書いてあります。同時代人の手によるまとまった回想記が三点残されているのはカントのユニークなところですが、本人をよく知っている人たちによって思いつかないしは生涯の概略が三通りも書き残されている幸運な哲学者は他にはなかなか見当たらないのです。この三点はもとは別々の著作ですが、今では必ず一つの本としてまとめて出版されています。

あともう一冊ありました。これはまだ何故この本が牧口の旧蔵書の中に入っていたのであるのか、というその理由に関して手がかりがないということを知りました。ラロミグエールという著者の書物です(写真2)。これはフランスの哲学者ですが、現在では完全に忘れられているといつてよろしいと思います。なぜそういうような人の本が遥々日本に届いて、しかも牧口常三郎の蔵書の中に見出されるのかということはとりあえず謎であるというような気がいたします。ただし、調べてみますと、このラロミグエールという人はその時代においては、アカデミズムの中心的な位置にいた人であることだけは確認することができました。19 世紀以後になりますと哲学者はすなわち大学教授であるという時代ですので、アカデミズムの中核に位置していたということは同時代には非常に重要な役割を果たしていた人と思われれます。しかし、この本の内容ないしはそれがどういうふうに関わってくるのかということに関しては私には見当が付きません。

(写真2：牧口が所蔵していたラロミグエール『知性の原理、もしくは観念の原因と起源に関する哲学教程』（創価学会所蔵））



まず蔵書の中の2冊の本をご紹介します。ところでいただきました評伝の456ページに、今度は本人の言葉としてカントの名前が出てくるところがあります。しかもそれは生涯で一番最後に書いた便りです。獄中から家族宛てに出した葉書の中で、「カントの哲学を精読して居る」という言葉が出てきました(1944年10月13日付)。仮にどなたであったとしても生涯の最後に「カントの哲学を精読して居る」という言葉が残されたとすれば、私共のようなカント研究者にとっては、どうしてなんだろう、何を読んでいたのだろうと、どうぞ本人と関わったのだろうと、た

ちどころに興味を喚起する事柄です。

私も大して調べていることではございませんけれども、実はもう一人獄中でカントを読んでそのことを家族に対して伝えていた例を存じています。それは、バルトロメオ・ヴァンゼッティという人です。この人はアメリカに移民をしたイタリア人で、アナキストです。アナキストはこの時代社会的に迫害を受けていました。日本でいうと大正時代です。それである事件にかこつけてヴァンゼッティという人は逮捕されて投獄されていました。今ではヴァンゼッティは冤罪であったという意見の方が強いようでありますけれども、当時は世界中で話題になった事件です。日本でも相当の関心を持たれました。そのヴァンゼッティがやはり獄中でカントを読み、そのことを家族宛ての手紙の中で触れています。ヴァンゼッティの場合はカントを読むことによって現在の苦勞、現在の状況をなんとか超えることができているという内容のものです（1926年12月8日付）。

こうしてみると、「獄中でカントを読む」というようなトボスが考えられるのかもしれませんが。実は埴谷雄高（1909 - 1997）という作家がいて、この人も逮捕され獄中でカントを読んでいたのです。よく言われる彼のドストエフスキー体験ほどではないのですが、『死霊』の埴谷さんの獄中カント体験は昭和文学史のちょっとしたエピソードになっています。何故こういう境遇でカントが出てくるのか。カントの哲学のうちに何があって、そういう逆境に耐えるという状況で念頭にのぼってくるのが可能であるのかということです。これは簡単に答えられることではないわけですが、皆様にご報告しておきたいというふうにした次第でございます。

2 カントと日本

さて、ここから「カントへの私の道」というテーマに入っていきたいと思います。しかし、今お話ししたことで多少は関わってくるところもございます。

2014年に、カント研究者の国際的な学会である国際カント学会がウィーンでありました。国際カント学会は5年に一度の大会でイマヌエル・カント賞という賞が、功績のあったカント研究者たちに授与されております。2014年に授与されたのはオノラ・オニールという女性のカント研究者でした。非常に小柄でしかも美しい銀髪が目立つ方でした。そのオノラ・オニールさんは受賞記念講演をされましたけれども、その講演を「私は40年間カントを研究した」という言葉で語り始められました。この言葉はその場にいた多くの人々に感銘を与えるとともに、共感をも得ていたように思います。なぜなら、40年、50年とカントを研究してきた研究者というのはその場では少なくなかったわけです。私自身もそのうちの一人であるということになります。カントに関わって40年、50年というのは珍しいことではなくて、一旦研究を始めてしまうとそれぐらいの歳月をカントと共に過ごした、という人は珍しくないと思います。

このごろ、有名なカント研究者たちがカントを論じている動画をインターネットでたくさん見

かけます。半世紀前の私の学生時代に既に古典と言われていた研究書を書いたその著者たちが、今も矍鑠として熱くカントを語っている現場をインターネット上で見つけることができます。これは私自身としては、あの人がまだこんなに元気だったのかという意味で驚くことでありましたが同時に、いわゆる儒夫をして立たしむるという感じがする光景です。つまりカント研究者というのは生涯カントについて考え続け、語り続けるというタイプの人たちが結構多いんだなという感慨を持ったわけです。ヘーゲル研究者とか、あるいは他の西洋哲学史上の大哲学者たちについてそれを研究した人たちが同じような晩年、あるいは最晩年、後期高齢者の時代を過ごしているのかどうかという点はまだ調査しておりませんが、どうもカントに関してはそういうことが目立つな、という印象をもっております。これもまた、どうしてなのだろうというその理由を考えてみたくなる事柄です。

どうもカントという哲学者には人を捉えて離さない何かが宿っているように思われるのです。それは一体なんなのだろうかということです。これも極めて大きな問題であり、それ自体が哲学的な興味をそそることです。けれども、今日お話ししようと思っているのはもうちょっと絞ったことになります。それは、カントと特に日本人とは深い縁で結ばれているようにも思われるわけですが、どういうところに理由があるのだろうか、ということです。言い換えると私たち日本人にとって明治以後、カントというのがどうしてこのように身近な、あるいは勉強したい、研究したいと思わせる存在であったのであろうかという問題であります。ヘーゲルとかシェリングとかいうカント以後の哲学者たちに比べてみて、特にカントが身近に感じられるというふうな事情がもしあったとするならば、それは一体どこに淵源しているのだろうかということを少し考えてみたいと思います。

いろんな事情があること、あるいはいろんな答え方があるということはすぐに分かる事柄です。明治になる前の日本において、どのような準備が行われていたかということ、そして、そのこととカントというのが結びつくなんらかの下地が設けられていたのではないのかということです。恐らくこういうふうに答える方は思想史の研究者をはじめとしておられるだろうと思います。例えば朱子学というのが江戸幕府の時代から言わば公認の学問として研究をされていた。その朱子学とカント哲学にどこか親近性を感じられると、こんなふうな考え方をする方も恐らくはおられるだろうと思います。私は思想史方面の専門家ではありません。あくまで哲学史研究という角度からカントにアプローチをしておりますので、私なりに考えたその結果ということを今日お話ししたいと思います。

では、どこに着眼点があるかというと、カントが私たちにとって身近な、親しい存在として受け入れられるということの背景には、カントが自分の哲学の方法として採用していたもの（カントはそれを考えに考えた上で採用したのですけれども）とわれわれ日本人が明治以降、西洋哲学と本格的に接したときにおかれた状況への苦心の対処策との間に親和性が生じたのではないかと、思われるのです。

3 哲学と哲学者の変貌 17世紀と18世紀

そのことについて、これからお話をしていきたいと思います。そのためにはまずカント以前とカントとの違いに目を向けたいと思います。カントは1724年に生まれて1804年に亡くなった人でありまして、大体18世紀という時代を生き抜いた人であると言えます。18世紀という時代はやっぱりヨーロッパの歴史の中でも激動の時代であったことは間違いがありません。カントはいわゆるフランス革命と呼ばれているものをリアルタイムで経験した人物です。

カントが生きたのは18世紀ですが、西洋哲学における近世の最初のピークは17世紀です。といいますのは、思いつくままに名前を列挙いたしますと、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュというような非常に有名な、スーパースターという言葉を使ってもいい、誰もが知っているような大きな哲学者が17世紀に輩出したからです。「天才の世紀」といういいかたをした人もあります。1596年に生まれて1650年に亡くなったのがデカルトですが、この人が出発点となって近世のその後の哲学者たちは出てきたと言えます。ですから17世紀は哲学史において非常に華々しい時代であったと言えます。

この17世紀という時代について考えておくことがカントを理解するためにはまず必要です。17世紀の哲学者たちとカントとの違いはどこにあるのでしょうか。そうしますと、17世紀における哲学という営みはかなり狭いエリアの中で行われていたということに気が付きます。つまり、パリ、アムステルダム、ロンドンという西ヨーロッパの3つの大きな都市を結ぶ三角形の中で17世紀の哲学というものは展開されていたと言えるのではないかと思います。デカルト(1596 - 1650)はフランス人ではあるわけですが、哲学者になってからはオランダに原則として住んでいました。そして時々パリに帰っていた。スピノザ(1632 - 1677)がアムステルダムに住んでいたということは、皆さんご存知のことだろうと思います。ライプニッツ(1646 - 1716)はアムステルダムにスピノザを訪ねて行ったりしています。こういうふうには、17世紀の哲学は、非常に狭いエリアにおいて、しかも大都会をベースとして、そのなかで哲学者たちが交流するという形態で成立していました。この大きな三角形エリアのうちに主要な哲学者たちは住んで、書簡を往復したり、時には相互に訪問したりしていた。デカルト、マルブランシュ(1638 - 1715)のほかに、パスカル(1623 - 1662)もこの三角エリアの中で活躍していました。ライプニッツはドイツ人ですが、彼が哲学者および数学者として第一線に躍り出たというのは、彼が1672年にパリに出てきてからのことです。

17世紀の哲学はこういう大都会が舞台であり、また担い手たちはそこに住んで、そのなかで非常に密接に交流をしていました。ライプニッツがスピノザを訪ねて行って、スピノザがまだ公にしていなかった『エチカ』という彼の主著の原稿を見せてもらう、というような付き合い方は、その後なかなか哲学者同士の付き合いとしては見られません。たとえば大学教師が哲学者であるのが普通になった19世紀においては見られなくなってしまったことです。哲学的にはライプニッツはスピノザを批判しましたが、付き合い方としてはそういう密接さをもっていたのです。

従って、17 世紀の哲学者たちはこういうふうに関境を越えた、いわば見えないコミュニティに属していたと言えるのではないかと思います。英語だと、レパブリック・オブ・レターズというような表現、「文芸共和国」なんていうふうに訳しておりますけれども、なにかそういう目に見えない共同体のうちに属しているのだという自覚をもったごく少数の人たちが哲学の最前線を担っていたのが 17 世紀という時代です。ごく少数の、お互いにほとんど面識があると言ってもいいぐらいな間柄の哲学者たちが担い手だったわけです。

それから、もちろん彼らのスポンサーの存在も忘れることができません。というのは、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュは誰一人大学教授ではなかった点が共通しています。芸術家ほどではありませんが、当然これらの人たちも研究生活を支えるためにスポンサーを必要としていました。王侯貴族で学問好きで哲学者たちを後援した人は、デカルトを賓師としたスウェーデン女王クリスティーナ（1626 - 1689）、ライプニッツが『モナドロジー』を届けた名将プリンツ・オイゲン（1663 - 1736）、『リヴァイアサン』のホップズ（1588 - 1679）を終身住み込み家庭教師としたデヴォンシャー公爵家など、この時代には無数にあげることができます。この点が先ほどのカントとは大きな違いをなしているわけです。大学ではなくて、自分たちこそが哲学の最前線を担っているという自覚をもって大変密なコミュニケーションをすることによって、17 世紀つまり近世哲学の最初のピークの時代というのを彼らは形成・実現したのです。

4 ケーニヒスベルク

以上のことを念頭におくと、これからお話をしようとしておりますカントはそれとは相当違った研究生活を送ったことがよくわかります。カントこそは王侯貴族や教会などのスポンサーなしで勉強し、大学で学び大学教師として生計を立て、大学の講義で研究を展開した、つまり大学が生み出した最初の哲学者と言えるのです。その上で、カントには彼をユニークな存在としたファクターがほかにもいくつかあります。カントの環境でまず第一のポイントは、カントが生まれて生きて死んだ場所であるケーニヒスベルクという都市の性格です。今現在はこの名前は地図の上にはなく、カーリーニングラードという名前で作っております。ということからも分かるように、現在ではドイツでさえなく、ロシア共和国の飛地です。モスクワを首都とするロシア共和国の本体からは一旦外に出て、その上でまたバルト海沿岸の地域として飛地になっているところに行くと、そこがカーリーニングラード地区です。それがかつてはケーニヒスベルクという名前のもとにプロイセンあるいはドイツ帝国の都市であり、カントがそこで生まれて生きて死んだところでした。したがって、西ヨーロッパ、つまりアムステルダム、パリ、ロンドンというところをベースにしている人たちから見ると、カントは完全にヨーロッパの辺境に生まれた哲学者であったと言えると思います。

カール・ローゼン克蘭ツ（1805 - 1879）という哲学者がおります。ヘーゲルの弟子です。

この人が1833年にケーニヒスベルク大学の教授に採用されまして、赴任のためドイツの中央部からケーニヒスベルクへの旅をすることになりました。非常に筆の立つ人物でしたから、その体験を著書として書き残しています。『ケーニヒスベルガー・スキッツェン』という題で、「ケーニヒスベルクのスケッチ」という意味です。大変面白いものです。カントが亡くなって30年ほどたったケーニヒスベルクの様子を生き生きと伝えている資料です。最初に出てくるのはケーニヒスベルクに至るまでの旅で、それ自体がもうすでに一つの体験記と言いますか、旅行記というような体裁で語られています。ほとんど外国に行くというような心持ちです。カントが活動した場所は19世紀の初めにおいても、かなり特異な地域であると一般ドイツ国民には受けとめられていたことがよくわかります。

そもそもケーニヒスベルクはもともと東プロイセンという沼沢の多い荒蕪地を開拓するための屯田兵村が起源でした。一橋大学の阿部謹也先生が研究された「ドイツ騎士修道会」という軍隊組織の修道会がヨーロッパ人として最初に入植してきて開墾した土地です。これははるかに十字軍の時代に遡ったことです。ですからこの地は伝統的にスラブとの、あるいは当初においては非キリスト教民族および地域との境目という意義を持っていました。近くにタンネンベルクという地名がありますが、ここは第一次世界大戦の時にドイツとロシアとの大きな会戦が行われた場所です。カントの在世中にもケーニヒスベルクは一時的にロシアに占領されていたことがあるくらいです。

どうも辺境という点ばかり強調しましたが、実はそれはケーニヒスベルクの一面に過ぎないことも付言しておかねばなりません。同時にケーニヒスベルクは立派な港湾を持っていて外国貿易が盛んに行われていた都市でもありました。カントより一年早く生まれた、ほぼ完全な同時代人に経済学の祖と言われるアダム・スミス（1723 - 1790）がいますが、スミスの『国富論』（1776）にケーニヒスベルクが出てきます（第四編第二章）。そこでスミスは海上貿易によって思わぬ遠隔地同士の行き来が生じている一例として、リスボンとケーニヒスベルクを結ぶ航路の存在を挙げ、注意を促しています。しかもこのルートの中継地としてアムステルダムの名前が出てきます。陸路では辺境であり、かつ海上交通によって世界につながっているというケーニヒスベルクのこの二面性はカント哲学そのもののメタファーになっていると私は考えています。海をベースとした空間感覚が陸とはまったく異なるものを生み出したことを強調したのはカール・シュミット（1888 - 1985）でした（『陸と海』）。カントは『人間学』で貿易によって殷賑を極める港湾を描き出した印象的な文章を残しています。カント自身がケーニヒスベルクという地に生まれたことになにか自負心のようなものが感じていたことがわかる記述です。

今年（2021年）11月に日本カント協会の大会が予定されておりまして、そこでの企画として「カントとケーニヒスベルク大学」という共同討議が行われることになっています。私は司会を割り当てられておりますが、チャンスがあれば司会者も割り込んでこういう話もさせていただきたいと考えています。この場では時間の制限がありますのでこれ以上の立ち入ったお話は断念いたします。

カントの主著は1781年に出版されました『純粋理性批判』です。カント57歳の出版です。これはわれわれにとって大いに力を与えることです。先ほど触れました17世紀の大哲学者たちは非常に早く自分の考え方というものをまとめてしまっています。そもそもデカルトは54歳、スピノザは45歳で亡くなっているのです。カントに近い時代の人で申しますと、イギリスにはヒューム（1711－1776）やパークリ（1685－1753）がいました。この人たちはデカルトやスピノザよりはもう少し長生きをしていますが、しかし哲学者としては20代で決定的な書物を出版しています。その後彼らの考えは本質的には変わっていません。パークリにせよ、ヒュームにせよ、20代で彼らの名を哲学史にとどめる著書を出してしまっているのです。これに対してカントは、20代ではまだ自分の考え方、何を言おうと自分はしているのかということが本人にとっても明らかになっていませんでした。57歳になって初めて、哲学史上に彼の名前を今に至るまでとどめている本が出たのです。大器晩成といっていいのかどうか分かりません。ただ後半生において大きなジャンプを経験した人であったと言えます。

ともかく、カントの哲学は1781年になってからが始まりです。ここでもう一度、辺境という点を実感するファクトがあります。『純粋理性批判』の1781年初版の扉は現在私たちが読んでいる刊本でも復刻して掲げるのが習わしになっています。それを見て驚くのは、初版の出版地はリガであることです。リガとは日本という「バルト三国」のうちラトビアの都市です。リガとはどこにあるか、すぐ答えられる人は少ないのではないかと心配するくらいのところですよ。こういうところで先ほどお話ししたカントの環境の二つの面のうち、辺境感がグメ押しされるわけです。ホップズの『リヴァイアサン』をはじめとして17世紀には大都会アムステルダムを出版地とした書物が結構あるわけですが、カントの『純粋理性批判』はそんな都会で出た本ではないのです。現代で言えば地方出版物です。『純粋理性批判』の初版本は日本にも何冊か入っており、その展示を見たことがあります。小さな版型に驚き、あまりに粗末な用紙と装丁にショックを受けた経験があります。隣には先ほど触れたエリアで17世紀に出版された豪華本が並べて展示してあったので、ひときわ鮮明なコントラストを示していました。

5 カントの戦略

もうちょっと話を具体化していくことにしたいと思います。ハンディを負った場所でカントが勉強したことから始めましょう。カントは生涯生まれた都市から一歩も出たことがなかったというのは神話ですが、今では「カリニングラード地区」と呼ばれている地域から外へは出たことがない人であるということは間違いありません。だから、カントはハンディキャップを背負った哲学者であったと言えます。先ほど触れました西ヨーロッパの都会でホットに論じられていた17世紀の哲学というのをカントも学び始めるわけですが、それを相当遠くの地域から一歩も出ることなしに勉強しなければならなかったのです。これがカントの哲学の勉強に最初与えられた

初期条件みたいなものであります。そんなカントが、それではどういう勉強をしたか、ということです。つまり、カントは自分が哲学を勉強していく上で、つまり哲学者になっていくうえで、ある戦略を立てていたと考えられるわけです。

それは一体どういうことであるのかということをこれから申し上げたいと思います。カントが立てた戦略と言いましても、もちろん私の戦略はこうだとカント自身が書いているわけではありません。それを私がカントからどのように読み取ったかというに過ぎません。しかしこの読みがカントへの私の道を開きました。さきほども言いましたように『純粋理性批判』という本を1781年に出してカントは哲学史の中にデビューしました。それまでのカントももちろんいろんな仕事をしていたので、一応ドイツ国内では名前を知られている哲学者であったようです。しかしカントの名前がワールドワイドになったのは1781年のこの書物以後です。1781年以後はフランスでも、イギリスでも、その名前が知られている哲学者になっていったわけです。従って、この本がカントのすべてとは申しませんが、すべての出発点であるとは言えると思います。この書においてカントの戦略を読み取ろうというのはそのゆえです。

では、この本のなかから読み取ることができるカントの戦略というのはなんでしょうか。ハンディキャップを転覆すると言いますか、ハンディキャップを却って強みへと逆転していく、そういう戦略をカントはとっていると私は考えています。これだけですと後進国の思想的優位という昔よく聞かされた話にすぎないと言われるかもしれません。しかし私が言いたいのはもっと即物的なことです。カントが採用した戦略だと私が考えるのは、『純粋理性批判』の外形から読み取れます。この『純粋理性批判』という本はちょっとおもしろい、ユニークな構成をもっています。そこにカントの戦略を探り当てられると私は思うのです。

大まかに捉えるならば、カントは『純粋理性批判』を、カント自身の主張を説くパートと、伝統的哲学（これを形而上学と言います）に批判を述べるパートという二つのパートから構成されているような書物として書きました。普通カント自身の主張を書いたこの第一部（というような言い方は本人はしていませんけれども）こそがカント哲学なのであって、それを解説するというのがカント哲学の入門であることになっています。けれども、実は、分量としては伝統的哲学の批判には費やした部分のほうがずっと多いというのがこの書物の実情なのです。そこに注目しなければいけないと私は考えます。しかも、カントがここでやっていたのは単なる批判ではない、ということを強調しておきたいと思います。単なる批判だったらそんなに膨大なページ数を費やす必要はないのです。単なる応用問題であるとするならば、本文が終わった後にアンバランスなぐらいのページ数を費やすはずはないと考えられるわけです。

それでは、一体カントは何をやっていたのかというと、伝統的な哲学を思考方式に還元するという作業です。ここところが実はカント哲学を考える上において、決定的に重要なポイントになるのではないのかと、こういうふうに私は考えているのであります。

この辺をもうちょっと具体的にお話することにしたいと思います。哲学の基礎的な部門を「形而上学」と申します。英語でいうと metaphysics という綴りになります。明治、あるいはもう

よっと早かったかもしれませんが、中国古典に典拠を仰ぐという手続きを踏まえたうえで「形而上学」という言葉を日本で造語しました。ところがこの形而上学という言葉自体がなんとなく雰囲気だけは伝わってくるものの、実態が読み取りにくい言葉になっております。そういうことを言えばそもそも「哲学」という言葉そのものが雰囲気は伝わるけれどもそれを手掛かりに内容を理解するということへと繋がっていきにくい言葉になっています。この点で、訳語の問題もわれわれにとってもまたハンディとして作用してきているのです。ともかく、これはアリストテレスという古代ギリシャの大哲学者から名前を、そして内容も伝えてきている学問です。

形而上学はなかなか内容をつかむことは難しいし、わが国では、大学の講義でも形而上学と銘打ってやっているのは、カトリック系の大学とか特別なところだけだろうと思います。しかしこれが、伝統的にはアカデミズム哲学の中核として位置付けられてきた部門です。先ほどから言っておりますように、近世哲学に登場する人たちはたとえ自分自身が大学の先生にならなかったとしても、大体大学ないしはそれに匹敵するところに通ったという経験をもっております。そこで何を習ったのか、何を教えられたのかということを経験は後年思い出します。そうすると、例えばロックとかヒュームとかデカルトは皆異口同音に、自分が教えられた哲学に対する反発が自分自身の哲学を形成する上での原動力になったと語っているわけです。これらの人々はそれぞれ当時のヨーロッパにおける最高学府に学びました。デカルトであればラフレーシュのコレージュ、ロックであればオックスフォード大学に行ったのですが、それぞれそこで習った哲学に甘んじられなかったと述懐しています。たしかにこの不満こそが近世哲学の出発点であったわけです。

しかし、そういう意味においては、誰もがアカデミズムを通過しているわけです。そして、その中核に置かれていたのは形而上学です。ただし、だれもが異口同音に形而上学に対して愛想をつかしたという趣旨の言葉を残しています。大学で習った哲学への不満というのは具体的には形而上学への不満です。この意味では近世の哲学者はみな形而上学批判をしているのです。それとカントの形而上学批判がどう違うのかということをお話ししようと思います。つまり、大学の学問が退屈だったということはみんな言います。それを原動力にしてみっとおもしろい自分の学問というものを発見したんだとか、作ったんだと説くのはむしろ常套的であるとさえ言えます。そして、ベーコンやロックやデカルトは、やはり形而上学そのものに対して嫌悪感を示しています。役に立たないとか、あるいは単なる伝統の集大成みたいなものに過ぎないものが、しかも頭ごなしに教えられるので、それにわくわくとしながらついていくことができなかったとか、そんなふうな体験談です。

カントの場合はそうではありません。カントはまず在来形而上学というものにもっと踏み込んでいます。ただ不満と嫌悪感を表明するだけではないのです。ではどうしたかと言いますと、何故そういうタイプの学問というのが哲学という資格を認定されて、しかも大学という制度の中に組み込まれるにいたったのであるかということ、ここにまで遡って考えようとしています。つまり、形而上学は形而上学で一つの哲学だという資格を認められたから大学のなかに、講義科目として場所を与えられていたのです。しかし、それが無味乾燥であるということはカントも認め

ないことではない。それどころか十分に認めることであるわけです。何故そうってしまったのか。つまり、形而上学の対象とは世界と人間と神であるということは形而上学自身もそういう主張をもっていますし、カントも自分の哲学で取り扱うものとして世界と人間と神をあげています。神と自然ないし世界と人間というものが、この宇宙を構成している三通りの、それぞれその在り方を異にしている存在であるわけです。これらについて解明するというのが哲学や、あるいは哲学の基礎的な部門としての形而上学というものの使命であると考えるのは全然不思議なことではないのです。

ところが、その考えた結果というよりは、そもそも考える際のやり方が、カントから見ると形而上学の場合は間違っていた。先ほど形而上学の思考方式という言い方をしました。17世紀の大哲学者たちが、彼らが習った形而上学に対する批判とか絶望感、失望感とそういったものを材料として、自分なりの独創的な哲学にたどり着いたとこういう体験談を語っていた。しかし、体験談に留まっていたということを、カントはそういう状況に直面して、何故駄目なのかというその根源に遡って問題を捉えたというところに、カント哲学の哲学史上の大きな功績ということを確認することができるのではないのかと考えるわけです。

そうするとこの思考方式というのは、具体的にはどういうことなのだろうかということが核心の問題になってくると言えます。そこに、カント自身の長年の工夫および大変な力を注ぎこんだ仕事ということがあったと考えられます。つまり、形而上学を大学の学科とか講座だとか、学問とかっていうふうに捉えてそれを批判していたのが17世紀の大哲学者たちであったわけですが、カントの場合は、単なる学科とか、教科書とか、講座だとかっていうことではなくて、「人間理性」というところに問題を遡らせて考えようとしたのです。だから、我々が人間であって理性的に考えようとする限りにおいて、いつでも、あるいはどんな場所においても、陥る可能性のある問題としての形而上学というふうに捉え方をつかめたというところにカントの面白さ、今に至るまでのカントのメッセージということを私たちが聞き取ろうとする理由を求めることができるのではないのかと思います。つまり人間が理性的であり、理性的であるという、存在であるがゆえに陥ってしまいやすい誤謬というのがあって、それをいわば具現したものが形而上学だという捉え方をカントはしたと私は見ます。学問が間違っているわけじゃない、テーマの立て方が間違っているわけではない、ただそれにアプローチする思考方式というものが、とかく人間が陥りやすい過ちというものがあって、それをいわゆる形而上学、伝統的な形而上学、デカルトらが大学で教わって彼らが反発したところの形而上学というものが、それに陥っていたのであるというのがカントの批判点である、ということになるわけです。

6 誤謬としての形而上学

では、具体的にこの人間理性そのものに宿っている思考方式としての誤謬に導いていくものは

一体何なんだろう、こういうことがカントにとっての究極の問いとなります。それはいくつかあるわけですが、その少なくとも一つであるということはできるかと思います。それを問題にしなければいけないというわけですね。そこでカントは、先ほどアリストテレスという人がヨーロッパの哲学の一番深いところでそれを支える人でもあり、また、それを導いてきた人でもあると申しました。またそれが批判されてきたという面もあるんですけども。そういう大きな存在であったという話をしました。そして、形而上学という本そのものも、形而上学という学問そのものもアリストテレスに根差しているというお話をいたしました。さらに、カントにとってのアリストテレスというものを煮詰めていくと、論理学にたどり着くということになるわけです。

一言で言ってしまうと、形而上学の思考方式というものは論理学が即現実というものを捉えることができるとこういうふうな考え方に基づいていたというのが、カントが捉えた形而上学の真相であるわけです。こう言っただけでは、ちょっと抽象的なところがあるので、もっと話を具体的なところにもっていきましょう。ここからがカントの相当独創的なと申しますか、苦勞をしたところ。また人によっては強引だと批判を向けるところではあるかもしれません。というのは、カントの頃は論理学というものは概念と推論と判断とこういうものによって組み立てられているんだと考えていたわけです。だから、論理学の構成要素そのものも概念と推論と判断という三つのものでよろしいと考えていました。そして、カントはこれら三つのものを運用することで形而上学という学問が生まれたと考えました。ところがここで間違った運用の仕方がなされているというのがカントの見立てです。

では、これが一番難しいといいますが、なかなか飲み込みにくいところですが、カントが形而上学の一番根本にある誤った思考法として取り出したのが、「系列 Reihe」として論理学を運用していくと表現することができるやり方です。これは、残念ながらカント哲学の解説も、そんなに詳しい解説が与えられているところではないわけです。つまり、普通カント哲学というと、先ほどお話ししたように、カント自身の主張ということを論じた、その部分を基にしてカント哲学そのものが説明され、講義されています。ところが実はカントのそういう主張というのがそもそも、哲学あるいは形而上学が今まで陥ってきたところの過ちをカントがまず捉えて、その過ちに陥らない、それに代わるものとして、持ち出されています。これが本来のカント哲学の主張がでてくる道筋になっているわけです。だから、実際には、この二つを、あるいはそのコントラストを捉えることがカント哲学の正面からの理解には必要なわけです。両者を引き比べて、両者を突き合わせてみるという手法を使うことで初めて、カントの言いたいことをいわば懐深く、より立体的に捉えることができる、こういうふうな性格をもっているのです。

そうすると、今、カント自身が使っている言葉で、「系列」という言葉で代表させました。英語で言いますと series という言葉になります。要するに、この系列は物と物とが順番に並んでいるというイメージです。ですから、形而上学の根本的な思考法は、物が順番に並んでいるというような仕方世界を捉えます。その順番を先のほうへ行くとか、始まりのほうへ行くとかいう仕方、順番づけられたものの全体を一つの「系列」として完結させたときに、「認識」という

ものが成り立つんだというわけです。ここはもう大変、おそらくは飲み込みにくい表現になってしまっていることをお詫びしなければなりません。ここを十分に説明していると、完全に大学の授業15回分くらい使わなければならないということになってしまいますので、結論だけをお話します。

カントにとって、形而上学的に物を知るということは、順序づけられた系列を完結させることでした。系列が完成された時に何かを知ったことになります。この時代の形而上学は世界と神とそれから人間（これは核心としては人間の魂です）を対象としています。したがって、これらのものを認識するというのはどういうことかということ、それらのものを順序がつけられた系列として捉え、その系列を完結させるという仕方では何かを捉えることにほかなりません。こんな考え方が形而上学の根本にあるというふうにカントは捉えたということになるわけです。

そして、これこそがカントによれば形而上学というものの誤謬の根源にある考え方です。もっと端的に言うならば、事物を単体で捉えてそれを「系列」として全体化させ完結させるという手法こそが形而上学が何事に対しても適用してそれによって物事を認識できたとして結論を出す際のやり方なのであると、このようにカントは捉えたということができないのではないかと考えています。

カントのテキストにご自分であたっていただければ、なるほどと思われるところがひょっとしたらあるかもしれないと考えています。先ほど名前を出したオニールさんみたいに40年間もかかった勉強の結論を、ひとことで言ってしまったというようなところがございますので、その辺はお詫びしなければいけません。

カントの現状認識としては、形而上学はまだ学問としての歩みを始めていない。数学であるとか、論理学であるとか、あるいはその物理であるとかいうような学問と比べてみて、哲学は恥ずかしいという状況判断ということのカントは『純粹理性批判』の序文の中で言っております。そういう判断の根拠になるのは形而上学がいまだに正しい思考法というものを、わがものとしていないからだという論旨になります。テーマの深刻さの割には、手法というのがあまりにも素朴、幼稚すぎるとデカルトやロックが考えたそういうタイプの哲学、つまり形而上学というものが生じてきた、その出発点であると考えたものをカントはこのように捉えたのです。だから、カントの哲学は、この点をターゲットにして自分自身の哲学を打ち出したものであるという角度からアプローチされるべきものであると言えるのではないかと思います。これから先はごく簡単に触れることにせざるを得ません。

まず、初めのほうに触れた話題の伏線を回収するということをいたします。カントはある戦略を立てたということを申しました。非常にハンディキャップを負った場所で一気に哲学の最前線にキャッチアップしなければならない。つまり、それに追いついてその全体をわがものとしなければならないという課題です。これは実は西田幾多郎が背負った課題というものとパラレルなところがあります。非常なハンディキャップがあるところで一気に自分一人で相手方というものを全体として捉えて、そのうえで自分の哲学を構成しなければならないのが西田哲学です。

西田哲学には自覚的にそれを果たすという抱負があります。カントもまたヨーロッパとはいえそういう大変な辺境の場所においてその西ヨーロッパのゴールデン・トライアングルで起こっていたことを、全部まとめて捉えていく必要があるというような課題を背負っていたのです。

彼がやった戦略は、いろいろな哲学、形而上学の中でのいろんなタイプというものが生まれてくる原点としての形而上学の思考法というところで押さえることでした。全体として自分に先立つ哲学の伝統を捉えて、その上で自分の哲学をそれに付け加えていくというのがカントがとった戦略でした。富永仲基（1715 - 1746）という江戸時代の天才的な学者がおりますけれども、彼は自分の方法論として「加上説」というものを唱えています。大乘非仏説という観点をこれで富永仲基は打ち出したわけです。それにも一脈相通ずるものがあると感じます。それがカントの方法であったということです。カントはそういう辺境にいるというデメリットを、却ってそこにいるからこそ、遠くからの眺めとして全体として捉えることができるという非常な特権的なポジションみたいなものに読み替えることができた。これは富永仲基もやっていたことです。日本にいるというデメリットを、遠くから大観するという、そのゆえのメリットに転換することができるという逆説です。鎖国の時代の日本に生きたからこそ、インドとか中国とかいうような非常に大きな文明を類型化して捉えることができるポジションに富永仲基は立つことができたのです（『翁の文』）。富永仲基が、それぞれの文明を固有の思考法に還元することができるということを、もうすでに江戸時代において指摘をしていたことをつい思い出してしまうわけです。

カントもまた遠くにいて中心からは外れていてリアルタイムで、あるいはその現場において自分自身も参加することができない。これはデメリットではあるわけなのですが、それを逆手にとって、遠くからの視線にだけ初めて見えてくるような姿として全体像を捉えることができた。それを自分の哲学の一つの柱にした。先ほど言いましたようなターゲットを捉えて、それにいわば対置するものとして自分の哲学を打ち出すことができた。これが結局、『純粹理性批判』という書物そのものを成り立たしめている根源だということができるのではないのかと思うわけです。従って当然、先ほど述べたような事物を単体で捉えて、それを「系列」として全体化するというので、その事物を捉えきったというふうにみなす思考法というものに対置しているカントの哲学、普通の意味でのカント哲学というものをこの観点から見直したら、こういったものを逆転していかなければならないということになるわけです。カント哲学の本当の話は実はここから始まるのです。しかし今日は時間が来ておりますので、カント哲学本体というよりは、「カントへの私の道」ということで話が終わってしまった嫌いがございます。けれども一応、デメリットをメリットに逆転するための戦略というのを積極的に採ったカントという人は、日本の富永仲基とか西田幾多郎というような大きな哲学者たちも採用していたのと同じような方法論を採っていた人として理解することができるのではないのかということが言いたかったわけでありまして。こういうようなことが今回の私の話の結論ということで、これで終わらせていただくことにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。